

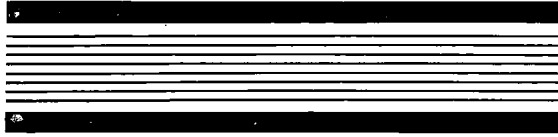
日本文学全集
13

永井荷風

すみだ川・腕くらべ・おかめ笹・墨東綺譚
つゆのあとさき・踊子・妾宅・申訳・他

河出書房

永井荷風



カラー版日本文学全集 13

1970©

昭和四十五年二月二十日 初版印刷
昭和四十五年二月二十八日 初版発行

定価 七五〇円

著者 永井荷風

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七二一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

093-331113-0961

目次

永井荷風

すみだ川……………五

腕くらべ……………二七

おかめ笹……………九九

雨瀟瀟……………一〇二

つゆのあとさき……………一七五

澤東綺譚……………三三

勲章……………二六二

踊子……………二七

妾宅……………二六九

葡萄棚……………二〇〇

桑中喜語……………二〇一

申 訳……………二二二

注 釈……………保昌正夫 三三三

年 譜……………小門勝二 三五一

解 説……………桑原武夫 三六五

卷頭写真……………小門勝二

色刷挿画……………木村莊八

溼東綺譚

雨瀟瀟
踊子

佐野繁次郎

おかめ笹
つゆのあとさき

安西啓明

すみだ川
腕くらべ

三井永一

永
井
荷
風

すみだ川*

一

俳諧師松風庵羅月は今戸で常磐津の師匠をしている実の妹をば今年
は孟蘭盆にもたずねずにしまったので毎日そのことのみ気にしてい
る。しかし日盛りの暑さにはさすがに家を出かねて夕方になるのを待
つ。夕方になると竹垣に朝顔のからんだ勝手口で行水をつかった後そ
のまま真裸体で晩酌を傾けやつのこと膳を離れると、夏の黄昏も家
家で焚く蚊遣りの煙とともにいつか夜となり、盆栽を並べた窓の外の
往来には簾越しに下駄の音職人の鼻唄人の話し声がにぎやかに聞え出
す。羅月は女房のお滝に注意されてすぐにも今戸へ行くつもりで格子
戸を出るのであるが、その辺の涼み台から声をかけられるがまま腰を
下すと、一杯機嫌の話好きに、毎晩きまつて埒もなく話し込んでしま
うのであった。

朝夕がいくらか涼しく楽になったかと思うとともに大変日が短くな
って来た。朝顔の花が日ごとに小さくなり、西日が燃える焰のように
狭い家中へ差し込んで来る時分になると鳴きしきる蟬の聲が一きわ耳
立って急しく聞える。八月もいつか半ば過ぎてしまったのである。
家の後の玉蜀黍の畠に吹き渡る風の響きが夜なぞは折々雨かと誤られ
た。羅月は若い時分したい放題身を持ち崩した道楽の名残りとして時候
の変り目といえは今だに骨の節々が痛むので、いつも人より先に秋の
立つのを知るのである。秋になったと思うとただわけもなく気がせわ

しくなる。

羅月はにわかに狼狽え出し、八日ごろの夕月がまだ真白く夕焼けの
空にかかっているところから小梅瓦町の住居を後にテクテク今戸をさし
て歩いて行つた。

堀割づたいに曳舟通りからすぐさま左へまがると、土地のものでな
ければ行く先の分らないほど迂回した小径が三田稲荷の横手を巡って
土手へと通じている。小径に沿うては田圃を埋め立てた空地に、新しい
貸長屋がまだ空家のままに立ち並んだところもある。広々とした構えの
外には大きな庭石を据え並べた植木屋もあれば、いかにも田舎らしい
茅葺きの人家のまばらに立ちつづいているところもある。それらの家
の竹垣の間からは夕月に行水をつかつている女の姿の見えることもあ
った。羅月宗匠はいくら年をとっても昔の気質は変わらないので見て見
ぬようにそっと立ち止るが、大概はぞっとしない女房ばかりなので、
落胆したようにそのまま歩調を早める。そして荒地や貸家の札を見て
過ぎるたびたび、何ともつかずその胸算用をしながら自分も懐手で
大儲けがして見たいと思う。しかしまた田圃づたいに歩いて行くうち
水田のところどころに蓮の花の見事に咲き乱れたさまを眺め青々した
稲の葉に夕風のそよぎをきけば、さすがは宗匠だけに、銭勘定の
ことよりも記憶に散在している古人の句をば実に巧いものだと思ひ返
すのであった。

土手へ上った時には葉桜のかげは早や小暗く水を隔てた人家には灯
が見えた。吹きはらう河風に桜の病葉がはらはら散る。羅月は休まず
歩きつづけた暑さにはと息をつき、ひろげた胸をば扇子であおいだ
が、まだ店をしまわずにいる休み茶屋を見つけてあわてて立ち寄り、
「おかみさん、冷で一杯」と腰を下した。正面に待乳山を見渡す隅田
川には夕風を孕んだ帆かけ船がしきりに動いて行く。水の面の黄昏れ
るにつれて鷗の羽の色が際立って白く見える。宗匠はこの景色を見る
と時候はちがうけれど酒なくて何の己れが桜かなと急に一杯傾けたく
なったのである。

休み茶屋の女房が縁の厚い底の上ったコップについて出す冷酒を、蘿月はぐいと飲み干してそのまま竹屋の渡し船に乗った。ちょうど河の中ほどへ来たところから舟のゆれるにつれて冷酒がおいおいにきいて来る。葉桜の上に輝きそめた夕月の光がいかにも涼しい。滑らかな満潮の水は「お前どこ行く」と流行唄にもあるようにいかにも投げやうた風に心持よく流れている。宗匠は目をつぶって独りで鼻唄をうたった。

向う河岸へつくと急に思い出して近所の菓子屋を探して土産を買、今戸橋を渡って真直ぐな道をば自分ばかりは足もとのたしかなつもりで、実は大分ふらふらしながら歩いて行った。

そここに二三軒今戸焼ききやきを売る店にわずかな特徴を見るばかり、いづこの場末にもよくあるような低い人家つづきの横町である。人家の軒下や路地口には話しながら涼んでいる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立って白く見えながら、あたりは一体にひっそりしてどこかで犬の吠える声と赤児のなく声が聞える。天の川の澄み渡った空に繁った木立を聳そびかしている今戸八幡の前まで来ると、蘿月は間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字ふしな豊と勘亭流で書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往来には人が二三人も立ち止って内なる稽古の浄瑠璃を聞いているた。

折々恐ろしい音して鼠の走る天井からホヤホヤの曇った六分心のランプがところどころ宝丹の広告や都新聞の新年附録の美人画なぞで破れ目をかくした襖をはじめ、飴色に古びた簾簾、雨漏りのあとのある古びた壁なぞ、八畳の座敷一体をいかにも薄暗く照らしている。古ぼけた蔑戸を立てた縁側の外には小庭があるのやらないのやら分らぬほどな闇の中に軒の風鈴が淋しく鳴り虫が静かに鳴いている。師匠のお豊は緑日ものの植木鉢を並べ、不動尊の掛け物をかけた床の間に後にしてべったり坐った膝の上に三味線をかかえ、煙の撥で時々前髪まへがみのあたりをかきながら、掛け声をかけては弾くと、稽古本を広げた桐の小机を

中にしてこなたには三十前後の商人らしい男が中音で、「そりゃ何を言わしゃんす、今さら兄よ妹と言うに言われぬ恋中は……。」と「小稲半兵衛」の道行を語る。

蘿月は稽古のすむまで縁近くに坐って、扇子をばちくりさせながら、まだ冷酒のすっかり醒めきらぬところから、時々はわれ知らず口の中で稽古の男と一しよに唄ったが、時々は目をつぶって遠慮なく囁ささやをした後、身体を軽く左右にゆすりながらお豊の顔をば何の気もなく眺めた。お豊はもう四十以上であらう。薄暗い釣しランプの光が瘦せこけた小作りの身体をばなおさらに老けて見せるので、ふいとこれが昔は立派な質屋の可愛らしい箱入娘だったのかと思うと、蘿月は悲しいとか淋しいとかそういう現実の感慨を通過して、ただただ不思議な気がしてならない。そのころは自分もやはり若くて美しく、女にすかれて、道楽して、とうとう実家を七生まで勘当されてしまったが、今になってはそのころのことはどうしても事実ではなくて夢としか思われない。算盤でおれの頭をなぐった親爺にしろ、泣いて意見を白鼠の番頭にしろ、暖簾を分けてもらったお豊の亭主にしろ、そういう人たちは怒ったり笑ったり泣いたり喜んだりして、汗をたらして飽きずによく働いていたものだが、一人一人皆死んでしまった今日となって見れば、あの人たちはこの世の中に生れて来ても来なくてもつまるところは同じようなものだった。まだしも自分とお豊の生きている間は、あの人たちは兩人の記憶のうちに残されているものの、やがて自分たちも死んでしまえばいよいよ何もかも煙になって跡方もなく消え失せてしまふのだ……。

「兄さん、実は二三日うちに私の方からお邪魔に上ろうと思っていたんだよ」とお豊が突然話した。

稽古の男は小稲半兵衛をさらった後同じようなお妻八郎兵衛の語り出しを二三次繰り返して帰って行ったのである。蘿月はもっともらしく坐り直して扇子で軽く膝を叩いた。

「実はね」とお豊は同じ言葉を繰り返して、「駒込のお寺が市区改正

で取払いになるんだとさ。それでね、死んだお父^{うち}アんのお墓^{やま}を谷^やなか染井かどこかへ移さなくっちゃならないんだってね、四五日前にお寺からお使いが来たから、どうしたものかと、その相談に行こうと思つてたのさ」

「なるほど」と蘿月はずなずいて、「そういうことなら打捨^{うちすて}つてもおけまい。もう何年になるかな、親爺^{おやぢ}が死んでから……」

首を傾^{かし}げて考えたが、お豊の方は着々話を進めて染井の墓地の地代が一坪^{いっぺい}いくら、寺への心づけがどうのこうのと、それについては女の身よりも男の蘿月に万事を引き受けて取り計らってもらいたいというのであった。

蘿月のもと小石川表町の相模屋^{さごみや}という質屋の後取り息子^{むすこ}であったが勘当の末若隠居の身となった。頑固^{がんこ}な父が世を去ってからは妹お豊を妻にした店の番頭が正直に相模屋の商売をつづけていた。ところが御維新このかた時勢の変遷で次第に家運の傾いて来た折も折火事にあつて質屋はそれなり潰れてしまった。で、風流三昧の蘿月は已むを得ず俳諧で世を渡るようになり、お豊はその後亭主に死に別れた不幸つづきに昔名を取った遊芸を幸い常磐津の師匠で生計を立てるようになった。お豊には今年十八になる男の子が一人ある。零落した女親がこの世の楽しみというのはまったくこの一人息子長吉の出世を見ようということばかりで、商人はいつ失敗するか分らないという経験から、お豊は三度の飯を二度にしても、行く行くはわが兒を大学校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思つてゐる。

蘿月宗匠は冷えた茶を飲み干しながら、「長吉^{ちやうきち}はどうしました」

するとお豊はもう得意らしく、「学校は今夏休みですがね、遊ばしといちゃいけないと思つて本郷まで夜学にやります」

「じゃ帰りは晚いね」

「ええ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますがね、随分遠路^{とおほし}ですからね」

「吾輩とは違つて今時の若いものは感心だね」宗匠は言葉を切つて、

「中学校だつてね、おれは子供を持ったことがねえから当節の学校のこととはちつとも分らない。大学校まで行くにやまだよほどかかるのかい」

「来年卒業してから試験を受けるんでさアね。大学校へ行く前に、もう一ツ……大きな学校があるんです」お豊は何もかも一口に説明してやりたいと心ばかりは急つても、やはり時勢に疎い女のことでたまち言ひ淀んでしまった。

「たいした経費^{かひ}だらうね」

「ええそれア、大抵じゃありませんよ。何しろ、あなた、月謝ばかりが毎月一円、本代だつて試験のたんびたんびに二三円じゃきませんしね、それに夏冬ともに洋服を着るんでしょう、靴だつて年に二足ははいしてしましますよ」

お豊は調子づいて苦心のほどを一倍強く見せようためか声に力を入れて話したが、蘿月はその時、それほどにまで無理をするなら、何も大学校へ入れないでも、長吉にはもっと身分相応な立身の途がありそうなのだという気がした。しかし口へ出して言うほどのことでもないので、何か話題の変化をと望む矢先へ、自然に思い出されたのは長吉が子供の時分の遊び友達でお糸といつた煎餅屋の娘のことである。蘿月はそのころお豊の家を訪ねた時にはきまつて甥^{なまこ}の長吉とお糸をつれては奥山や佐竹ッ原の見世物を見に行つたのだ。

「長吉が十八じゃ、あの娘はもう立派な姉さんだらう。やはり稽古に來るか」

「家へは来ませんがね、この先の杵屋^{きや}さんにや毎日通つてますよ。もうじき葎町^{わかし}へ出るんだって言いますがね……」とお豊は何か考へるらしく語を切つた。

「葎町へ出るのか。そいつア豪儀だ。子供の時からちよいと口のききようのませた、いい娘だつたよ。今夜にでも遊びに來りやアいいにねえ、お豊」と宗匠は急に元氣づいたが、お豊はボンと長煙管をはたいて、

「以前とちがつて、長吉も今が勉強ざかりだしね……」

「ははははは。間違いてもあつちやならないと言うのかね。もつとだよ。この道ばかりは全く油断がならないからな」

「ほんとさ。お前さん」お豊は首を長く延ばして、「私の僻目^{ひくめ}かも知れないが、実はどうも長吉の様子が心配でならないのさ」

「だから、言わないこつちやない」と蘿月は軽く握り拳で膝頭をたたいた。お豊は長吉とお糸のことがたど何となしに心配でならない。

というのは、お糸が長唄の稽古帰りに毎朝用もないのにきつと立ち寄って見る、それをば長吉は必ず待っている様子でその時間ごろには一足だつて窓の傍を去らない。そのみならず、いつぞやお糸が病気で十日ほど寝ていた時には、長吉は外目もおかしいほどにほんやりしていたことなどを息もつかずに語りつづけた。

次の間の時計が九時を打ち出した時突然格子戸ががらりと明いた。その明けようでお豊はすぐに長吉の帰って来たことを知り急に話を途切らしその方に振り返りながら、

「大変早いようだね、今夜は」

「先生が病気で一時間早くひけたんだ」

「小梅の伯父さんがおいでだよ」

返事は聞えなかったが、次の間に包みを投げ出す音がして、すぐさま長吉は温順しそうな弱そうな色の白い顔を裸の間から見えた。

二

残暑の夕日が一しきり夏の盛りよりも烈しく、ひろびろした河面一帯に燃え立ち、ことさらに大学の艇庫の真白なベンキ塗りの板目に反映していたが、たちまち燈の光の消えて行くようにあたりは全体に薄暗く灰色に変色して来て、満ち来る夕沙の上を滑って行く荷船の帆のみが真白く際立った。と見る間もなく初秋の黄昏は幕の下りるように早く夜に変わった。流れる水がいやに眩しくきらきら光り出して、渡し船に乗っている人の形をくっきりと墨絵のように黒く染め出した。堤

の上に長く横たわる葉桜の木立はこなたの岸から望めば恐ろしいほど真暗になり、一時は面白いように引きつづいて動いていた荷船はいつの間にか一艘残らず上流の方に消えてしまつて、釣の帰りらしい小舟がところどころ木の葉のように浮いているばかり、見渡す隅田川はふたたびひろびろとしたばかりか静かに淋しくなつた。はるか川上の空のはずれに夏の名残りを示す雲の峰が立っていて細い稲妻が絶え間なく閃めいては消える。

長吉は先刻から一人ぼんやりして、ある時は今戸橋の欄干に凭れたり、ある時は岸の石垣から渡し場の棧橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めていた。今夜暗くなつて人の顔がよくは見えない時分になつたら今戸橋の上でお糸と逢う約束をしたからである。しかしちょうど日曜日に當つて夜学校を口実にも出来ないところから夕飯を済ますが否やまだ日の落ちぬうちふいと家を出てしまった。一しきり渡し場へ急ぐ人の往来も今ではほとんど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺の高い木立を倒さに映した山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添う低い小家の格子戸外には裸体の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう来る時分であらうと思つて一心に橋向うを眺めた。

最初に橋を渡つて来た人影は黒い麻の僧衣をきた坊主であつた。つづいて尻端折りの股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、しばらくしてから、蝙蝠傘と小包みを提げた貧しげな女房が日和下駄で色気もなく砂を蹴立てて大股に歩いて行つた。もういくら待つても人通りはない。長吉は詮方なく疲れた眼を河の方に移した。河面は先刻よりも一体に明るくなり気味悪い雲の峯は影もなく消えている。長吉はその時長命寺辺の堤の上の木立から、他分旧暦七月の満月である、赤味を帯びた大きな月の昇りかけているのを認めた。空は鏡のように明るいのでそれを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星のたった一つ見えるばかりでその他はことごとくあまりに明るい空の光

に掻き消され、横さまに長く棚曳く雲のちぎれが銀色に透き通って輝いている。見る見るうち満月が木立を離れるに従い河岸の夜露をあびた瓦屋根や、水に濡れた棒枕、満潮に流れ寄る石垣下の藻草のちぎれ、船の横腹、竹竿なぞが、いち早く月の光を受けて蒼く輝き出した。たちまち長吉は自分の影が橋板の上にだんだんに濃く描き出されるのを知った。通りかかるホーカイ節の男女が二人、「まア御覧よ。お月様」と言つてしばらく立ち止った後、山谷堀の岸辺に曲るが否や当てつけがましく、

「書生さん橋の欄干に腰打ちかけて——」

と立ちつづく小家の前で歌つたが金にならないと見たか歌いもおわらず、元の急ぎ足で吉原土手の方へ行つてしまつた。

長吉はいつも忍び会ひの恋人が経験するさまざまの懸念と待ちあぐむ心のいらだちのほか、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行く末……行く末というよりも今夜会つて後の明日はどうなるのであらう。お糸は今夜かねてから話のしてある霞町の芸者屋まで出かけて相談をして来るということで、その道中をば二人一緒に話しながら歩こうと約束したのである。お糸がいよいよ芸者になつてしまえばこれまでのように毎日逢うことができなくなるのみならず、それが万事の終りであるらしく思われてならない。自分の知らないいかにも遠い国へとふたたび帰ることなく去つてしまふような気がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみじみ思った。あらゆる記憶の数々が電光のように閃く。最初地方町の小学校へ行くころは毎日のように喧嘩して遊んだ。やがては皆なから近所の板塀や土蔵の壁に相々傘をかかれて囃された。小梅の伯父さんにつれて奥山の見世物を見に行つたり池の鯉に餌をやつたりした。

三社祭の折お糸はある年踊り屋台へ出て道成寺を踊つた。町内一同で毎年汐干狩りに行く船の上でもお糸はよく踊つた。学校の帰り道には毎日のように待乳山の境内で待ち合わせて、人の知らない山谷の裏

町から吉原田圃を歩いた……。ああ、お糸はなぜ芸者なんぞになるんだらう。芸者なんぞになつちやいけないと引き止めたい。長吉は無理にも引き止めねばならぬと決心したが、すぐその傍から、自分はお糸に対しては到底それだけの威力のないことを思い返した。はかない絶望と諦めを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、このごろになつては長吉はことさらに日一日とお糸がはるか年上の姉であるような心持がしてならぬのであつた。いや最初からお糸は長吉よりも強かつた。長吉よりもはるかに臆病ではなかつた。お糸長吉と相々傘にかかれて皆なから囃された時でもお糸はびくともしなかつた。平気な顔で長ちゃんにはあたひの旦那だよと怒鳴つた。去年初めて学校からの帰り道待乳山で待ち合わそうと申し出したのもお糸であつた。宮戸座の立ち見へ行こうと言つたのもお糸が先であつた。帰りの晩くなることをもお糸の方がかえつて心配しなかつた。知らない道に迷つても、お糸は行けるところまで行つてごらんよ。巡査さんにきけば分るよと言つて、かえつて面白そうにずんずん歩いた……。

あたりを構わず橋板の上に吾妻下駄を鳴らす響きがして、小走りに突然お糸がかけ寄つた。

「おそかつたでしよう。氣に入らないんだもの、母さんの結った髪なんぞ」と馳け出したためにことさらはつれた髪を直しながら、「おかしいでしよう」

長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかりである。いつもと變りのない元氣のいいはしやぎきつた様子がこの場合むしろ憎らしく思われた。遠い下町に行つて芸者になつてしまふのが少しも悲しくないのかと長吉は言いたいことも胸一ぱいになって口には出ない。お糸は河水を照らす玉のような月の光にも一向氣のつかない様子で、

「早く行こうよ。私お金持ちだよ。今夜は。仲店でお土産を買つて行くんだから」とすたすた歩きだす。

「明日、きつと帰るか」長吉は吃るようにして言いきつた。

「明日帰らなければ、明後日の朝はきつと帰つて来てよ。不斷着だ

の、いろんなもの持って行かなくっちゃならないから」

待乳山の麓を聖天町の方へ出ようと細い路地をぬけた。

「なぜ黙ってるのよ。どうしたの」

「明後日帰って来てそれからまたあっちへ去ってしまふんだらう。

え。お糸ちゃんはどうそれなり向うの人になっちゃうんだらう。もう僕とは会えないんだらう」

「ちよいとい遊びに帰って来るわ。だけれど、私も一生懸命にお稽古しなくっちゃならないんだもの」

少しは声を曇らしたもののその調子は長吉の満足するほどの悲愁を帯びてはいなかった。長吉はしばらくしてからまた突然に、

「なぜ芸者なんぞになるんだ」

「またそんなこときくの。おかしいよ。長さんは」

お糸はすでに長吉のよく知っている事情をばふたたびくどくどしく繰り返した。お糸が芸者になるということは二三年いやもつと前から長吉にもよく分っていたことである。その起因は木工であつたお糸の父親がまだ生きていたころから母親は手内職にと針仕事をしていたが、その得意先の一軒で橋場の妾宅にいた御新造がお糸の姿を見てぜひ娘分にして行く末は立派な芸者にしたいと言いつ出したことからである。御新造の実家は葎町で幅のきく芸者家であつた。しかしそのころのお糸の家はさほどに困つていなくなつたし、第一に可愛い盛りの子供を手放すのが辛かつたので、親の手元でせいいぜい芸を仕込ますことになった。その後父親が死んだ折には差し当り頼りのない母親は橋場の御新造の世話で今の煎餅屋を出したような関係もあり、万事が金銭上の義理ばかりでなくて相手の好意から自然とお糸は葎町へ行くように誰れが強いるともなく決まっていたのである。百も承知しているこんな事情を長吉はお糸の口からきくために質問したのでない。お糸がどうせ行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分のために別れを惜しむような調子を見せてもらいたいと思つたからだ。長吉は自分とお糸の間にはいつの間にか互いに疎通しない感情の相違の生じて

いることを明らかに知つて、さらに深い悲しみを感した。

この悲しみはお糸が土産物を買うため仁王門を過ぎて仲店へ出た時さらにまた堪えがたいものとなつた。夕涼みに出かける賑やかな人出の中にお糸はふいと立ち止つて、並んで歩く長吉の袖を引き、「長さん、あたしもじきあんな扮装するんだねえ。細縮緬だねきつと、あの羽織……」

長吉は言われるままに見返ると、島田に結つた芸者と、それに連れ立つて行くのは黒緞の紋付きをきた立派な紳士であつた。ああお糸が芸者になったら一緒に手を引いて歩く人はやっぱりああいふ立派な紳士であらう。自分は何年たつたらあんな紳士になれるのかしら。兵児帯一ツの現在の書生姿が言うに言われず情なく思われると同時に、長吉はその将来どころか現在においても、すでに單純なお糸の友達たる資格さえないもののような心持がした。

いよいよ御神燈のつづいた葎町の路地口へ来た時、長吉はもうこれ以上はかないとか悲しいとか思う元氣さなくなつて、ただぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行く先知れず曲り込んでゐるのを不思議そうに覗き込むばかりであつた。

「あの、一イニウ三イ……四つ目の瓦斯燈の出るところだよ。松葉屋と書いてあるだらう。ね。あの家よ」とお糸はしばしば橋場の御新造につれて来られたり、またはその用事で使いに來たりしてよく知っている軒先の燈を指し示した。

「じゃ僕は帰るよ。もう……」と言ふばかりで長吉はやっぱり立ち止つてゐる。その袖をお糸は軽く捕えてたちまち媚びるように寄り添ひ、

「明日か明後日、家へ帰つて来たときと逢おうね。いいかい。きつとよ。約束してよ。あたいの家へおいでよ。よくッて」

「ああ」

返事をきくと、お糸はそれですっかり安心したもののごとくすたすた路地の溝板を吾妻下駄に踏みならし振り返り返りもせずに行つてしまつ

た。その足音が長吉の耳には急いで馳けて行くように聞えた、かと思ふ間もなく、ちりんちんと格子戸の鈴の音がした。長吉は覚えず後を追つて路地内へはいろうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人声とともに開いて、細長い弓張提灯を持った男が出て来たので、何ということなく長吉は氣後れのしたばかりか、顔を見られるのが厭に、一散に通りの方へと遠ざかった。円い月は形が半分小さくなって光が蒼く澄んで、静かに響える裏通りの倉の屋根の上、星の多い空の真中に高く昇っていた。

三

月の出が夜ごとおそくなるにつれてその光はだんだん冴えて来た。河風の湿ッばさが次第に強く感じられて来て浴衣の肌がいやに薄寒くなった。月はやがて人の起きているころにはもう昇らなくなった。空には朝も昼過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲は重なり合つて絶えず動いているので、時としてはわずかにその間々にことさららしく色の濃い青空の残りを見せておきながら、空一面に蔽ひ冠さる。すると氣候は恐ろしく蒸暑くなつて来て、自然と浸み出る脂汗が不愉快に人の肌をねばねばさせるが、しかした、そういう時にはきまつて、その強弱とその方向の定まらない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んではまた降りつづくことがある。この風やこの雨には一種特別の底深い力が含まれていて、寺の樹木や、河岸の葦の葉や、楊末につづく貧しい家の板屋根に、春や夏には決して聞かれない音響を伝える。日が恐ろしく早く暮れてしまうだけ、長い夜はすぐに寂々と更け渡つて来て、夏ならば夕涼みの下駄の音に遮られてよくは聞えない八時か九時の時の鐘があたりをまるで十二時のごとく静かにしてしまふ。蟋蟀の声はいそがしい。燈火の色はいやに澄む。秋。ああ秋だ。長吉は初めて秋というものはなるほどいやなものだ。実に淋しくつたまらぬものだと思ふ。朝早く母親の用意してくる弁

当箱を書物と一所に包んで家を出て見たが、二日目三日目にはつくづく遠い神田まで歩いて行く氣力がなくなつた。今までは毎年長い夏休みの終るころといえば学校の教場が何となく恋しく授業の開始する日が心待ちに待たれるようであつた。そのういういしい心持はもう全く消えてしまつた。つまらない。学問なんぞしたつてつままるものか。学校は己れの望むような幸福を与えるところではない。……幸福とは無関係のものであることを長吉は物新しく感じた。

四日目の朝いつものように七時前に家を出て觀音の境内まで歩いて来たが、長吉はまるで疲れきつた旅人が路傍の石に腰をかけるように、本堂の横手のベンチの上に腰を下した。いつの間に掃除をしたものか朝露に湿つた小砂利の上には、投げ捨てた汚い紙片もなく、朝早い境内はいつもの雑沓に引きかえて妙に広く神々しく寂としてゐる。本堂の廊下にはここで夜明ししたらしい迂散な男が今だに幾人も腰をかけていて、その中には垢じみた単衣の三尺帯を解いて平氣で禪をしめ直している奴もあつた。このごろの空癖で空は低く鼠色に曇り、あたりの樹木からは虫囀んだ青いままの木の葉が絶え間なく落ちる。烏や鶏の啼き声鳩の羽音が爽やかに力強く聞える。溢れる水に濡れた御手洗の石が翻える奉納の手拭のかげにも何となく冷たいように思われた。それにもかかわらず朝参りの男女は本堂の階段を上る前にいずれも手を洗うために立ち止まる。その人々の中に長吉は偶然にも若い一人の芸者が、口には桃色のハンケチを啣えて、一重羽織の袖口を濡らすまいためか、真白な手先をば腕までも見せるように長くさし伸ばしているのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけている書生が二人、「見ろ見ろ、ジゲルだ。わるくないア」と言っているのさへ耳にした。

島田に結つて弱々しく両肩の撫で下つた小作りの姿と、口尻のしまつた円顔、十六七の同じような年ごろとが、長吉をしてその瞬間危くベンチから飛び立たせようとしたほどお糸のことを連想せしめた。お糸は月のいいあの晩に約束した通り、その翌々日に、それからは長く

葭町の人たるべく手荷物を取りに帰って来たが、その時長吉はまるで別の人のようにお糸の姿の変ってしまったのに驚いた。赤いメレンスの帯ばかり締めていた娘姿が、突然たった一日の間に、ちょうど今御手洗で手を洗っている若い芸者そのままの姿になってしまったのだ。薬指にはもう指環さえはめていた。用もないのに幾たびとなく帯の間から鏡入れや紙入れを抜き出して、白粉をつけ直したり鬘のはつれを撫で上げたりする。戸外には車を待たしておいていかにも急いだい切な用件を身に帯びているといった風で、一時間もたつたかないうちに帰ってしまった。その帰りがけ長吉に残した最後の言葉はその母親の「お師匠さんのおばさん」にもよろしく言ってくれということであった。まだいつ出るのか分らないからまた近いうちに遊びに来るわという懐かしい声も聞かれないのではなかったが、それはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴れた人の如才ない挨拶としか長吉には聞き取れなかった。娘であったお糸、幼馴染みの恋人のお糸はこの世にはもう生きていないのだ。路傍に寝ている犬を驚かして勢いよく駆け去った車の後に、えも言われず立ち迷った化粧の匂いが、いかに苦しく、いかに切なく身中にしみ渡ったであろう……。

本堂の中に消えた若い芸者の姿はふたたび階段の下に現われて仁王門の方へと、素足の指先に突っ掛けた吾妻下駄を内輪に軽く踏みながら歩いて行く。長吉はその後姿を見送るとまたさらに恨めしいあの車を見送った時の一刹那を思い起すので、もう何としても我慢が出来ぬというようにベンチから立ち上った。そして知らず知らずその後を追うて仲店の尽きるあたりまで来たが、若い芸者の姿はこの横町へ曲ってしまったものか、もう見えない。両側の店では店先を掃除して品物を並べたてている最中である。長吉は夢中で雷門の方へどんどん歩いた。若い芸者の行衛を見究めようというのではない。自分の眼にばかりありあり見えるお糸の後姿を追って行くのである。学校のことも何もかも忘れて、駒形から蔵前、蔵前から浅草橋……それから葭町の方へとどんどん歩いた。しかし電車の通っている馬喰町の大通

りまで来て、長吉はどの横町を曲ればよかったのか少しく当惑した。けれども大体の方角はよく分っている。東京に生れたものだけに道をきくのが厭である。恋人の住む町と思えば、その名をいたずらに路傍の他人に漏らすのが、心の秘密を探られるようで、ただわけもなく恐ろしくてならない。長吉は仕方なしにただ左へ左へと、いいかげんに折れて行くと蔵造りの間屋らしい商家のつづいた同じような堀割の岸に二度も出た。その結果長吉ははるか向うに明治座の屋根を見てやがてや広い往来へ出た時、その遠い道のはずれに河蒸汽船の汽笛の音の聞えるのに、初めて自分の位置と町の方角とを覚った。同時に非常に疲労を感じた。制帽を冠った額のみならず汗は袴をはいた帯のまわりまでしみ出していた。しかしもう一瞬間とても休む気にはならない。長吉は月の夜に連れられて来た路地口をば、これはまた一層の苦心、一層の懸念、一層の疲労をもって、やっとのことで見出し得たのである。

片側に朝日がさし込んでいるので路地の内は突当りまで見透された。格子戸づくりの小さい家ばかりでない。昼間見ると意外に屋根の高い倉もある。忍び返しをつけた板塀もある。その上から松の枝も見える。石灰の散った便所の掃除口も見える。塵芥箱の並んだところもある。その辺に猫がうろうろしている。人通りには案外に烈しい。きわめて狭い溝板の上を通行の人は互いに身を斜めに捻じ向けて行き交う。稽古の三味線に人の話し声が交って聞える。洗い物する水音も聞える。赤い腰巻に裾をまくった小女が草箒で溝板の上を掃いている。格子戸の格子を一本一本一生懸命に磨いているものもある。長吉は人目の多いのに気後れしたのみでなく、さて路地内に進み入ったにしたところで、自分はどうするかと初めて反省の地位に返った。人知れず松葉屋の前を通って、そっとお糸の姿を垣間見たいとは思ったが、あたりがあまりに明る過ぎる。さらばこのまま路地口に立って、お糸が何かの用で外へ出るまでの機会を待とうか。しかしこれもまた、長吉には近所の店先の人目がことごとく自分ばかりを見張って

いるように思われて、とても五分と長く立っていることはできない。長吉はとにかく思案をしないおすつもりで、折から近所の子供を得意にする栗餅屋の爺がカラカラカラと杵をならして来る向うの横町の方へと遠ざかった。

長吉は浜町の横町をば次第に道の行くままに大川端の方へと歩いて行った。いかほど機会を待っても昼中はどうしても不便であることをわずかに悟り得たのであるが、すると、今度はもう学校へは遅くなつた。休むにしても今日の半日、これから午後の三時までをどうしてどこに消費しようかという問題の解決に迫られた。母親のお豊は学校の時間割までをよく知り抜いているので、長吉の帰りが一時間早くても、晩くても、すぐに心配して煩く質問する。無論長吉は何とでも容易く言い紛らすことは出来ると思うものの、それだけの嘘をつく良心の苦痛に逢うのが厭でならない。ちよど来かかる川端には、水練場の板小屋が取り払われて、柳の木蔭に人が釣をしている。それをば通りがかりの人が四人も五人もぼんやり立って見ているので、長吉はいい都合だと同じように釣を眺めるふりでそのそばに立ち寄ったが、もう立っているだけの力さえなく、柳の根元の支木に背をよせかけながらしゃがんでしまった。

さつきから空の大半は真青に晴れて来て、絶えず風の吹き通うにもかかわらず、じりじり人の肌に焼き附くような湿気のある秋の日は、目の前なる大川の水面に眩しく照り輝くので、往來の片側に長くつづいた土塀からこんもりと枝を伸ばした繁りの蔭がいかに涼しそうに思われた。甘酒屋の爺がいつかこの木蔭に赤く塗った荷を下していた。川向うは日の光の強いために立ち続く人家の瓦屋根をはじめ一帯の眺望がいかに汚らしく見え、風に追いやられた雲の列が盛んに煤煙を吐く製造場の煙筒よりもはるかに低く、動かずに層をなして浮んでいる。釣道具を売る後の小家から十一時の時計が鳴った。長吉は数えながらそれを聞いて、初めて自分はいかに長い時間を歩き暮したかに驚いたが、同時にこの分で行けば三時までの時間を空費するのさ

して難くはないとやや安心することも出来た。長吉は釣師の一人が握り飯を食いはじめたのを見て、同じように弁当箱を開いた。開いたけれども何だかきまりが悪くて、誰か見ていやしいかとときよろきよろ四辺を見廻した。幸い午近くのことで見渡す川岸に人の往來は杜絶している。長吉は出来るだけ早く飯でも菜でも皆な鵜呑みにしてしまつた。釣師はいずれも木像のように黙っているし、甘酒屋の爺は居眠りしている。午過ぎの川端はますます静かになって犬さへ歩いて来ないところから、さすがの長吉も自分はなぜこんなにきまりを悪るのであるう臆病なのであるうとわれながらおかしい気にもなつた。

両国橋と新大橋との間を一廻りした後、長吉はいよいよ浅草の方へ帰ろうと決心するにつけ、「もしや」という一念にひかされてふたたび霞町の路地口に立ち寄って見た。すると午前ほどには人通りがないのにまず安心して、おそろおそろ松葉屋の前を通って見たが、家の中は外から見ると非常に暗く、人の声三味線の音さえ聞えなかった。けれども長吉には誰にも咎められずに恋人の住む家の前を通つたというそれだけのことが、ほとんど破天荒の冒険をあえてしたような満足を感じさせたので、これまで歩きぬいた身の疲労と苦痛とを長吉はついに後悔しなかった。

四

その週間の残りの日数だけはどうやらこうやら、長吉は学校へ通つたが、日曜一日を過すとその翌朝は電車に乗って上野まで来ながらふいと下りてしまった。教師に差し出すべき代数の宿題を一つもやっておかなかつた。英語と漢文の下読みをもしておかなかつた。それのみならず今日はまた、およそ世の中で何よりも嫌いな何よりも恐ろしい機械体操のあることを思い出したからである。長吉には鉄棒から逆さにぶらさがったり、人の丈より高い柵の上から飛び下りるようなことは、いかに軍曹上りの教師から強いられても全級の生徒から一斉に笑われても到底出来得べきことではない。何によらず体育の遊戲にか

けては、長吉はどうしても他の生徒一同に伴って行くことが出来ないで、自然と輕侮の聲のうちに孤立する。その結果は、ついに一同から意地悪くいじめられることになりやすい。学校は単にこれだけでも随分厭なところ、苦しいところ、辛いところであった。されば長吉はその母親がいかに望んだところで今になっては高等学校へはいらうという氣は全くない。もし入学すれば校則として当初の一年間はぜひとも狂暴無残な寄宿舎生活をしなければならぬことを聴き知っていたからである。高等学校寄宿舎内に起るいろいろな逸話は早くから長吉の胆を冷しているのであった。いつも画学と習字にかけては全級誰も及ぶもののない長吉の性情は、鉄拳だとか柔術だとか日本魂、だとかいうものよりも全く異った他の方面に傾いていた。子供の時から朝夕に母が渡世の三味線を聴くのが大好きで、習わずして自然に絃の調子を覚え、町を通る流行唄などは一度聴けばすぐに記憶するくらいであった。小梅の伯父なる蘿月宗匠は早くも名人になるべき素質があると見抜いて、長吉をば檜物町でも植木店でもどこでもいいから一流の家元へ弟子入りをさせたらばとお豊に勧めたがお豊は断じて承諾しなかった。のみならず以来は長吉に三味線を弄ることをば口喧しく禁止した。

長吉は蘿月の伯父さんの言ったように、あの時分から三味線を稽古したなら、今ごろはとにかく一人前の芸人になっていたに違いない。さすればよしやお糸が芸者になったにしたらとところで、こんな悲惨な目に遇わずとも済んだであらう。ああ実に取返しつかないことをした。一生の方針を誤ったと感じた。母親が急に憎くなる。例えられぬほど怨しく思われるに反して、蘿月の伯父さんのことが何となく取り繕って見たように懐しく思い返された。これまでは何の氣もなく母親からもまた伯父自身の口からもたびたび聞かされていた伯父が放蕩三昧の経歴が恋の苦痛を知り初めた長吉の心にはすべて新しい何かの意味をもって解釈されはじめた。長吉は第一に「小梅の伯母さん」というのは元金瓶大黒の華魁で明治の初め吉原解放の時小梅の伯父さん

を頼って来たのだとやという話を思い出した。伯母さんは子供のころ自分をば非常に可愛がってくれた。それにもかかわらず、自分の母親のお豊はあまりよくは思っていない様子で、盆暮の挨拶もほんの義理一遍らしいことを構わず素振りに現わしていたことさえあった。長吉はここでふたたび母親のことを不愉快にかつ憎らしく思った。ほとんど夜の目も離さぬほど自分の行いを目成っているらしい母親の慈愛が窮屈でたまらないだけ、もしこれが小梅の伯母さんみたような人であったら——小梅のおばさんはお糸と自分の二人を見て何とも言えない情のある声で、いつまでも仲よくお遊びよと言ってくれたことがあろう。——自分の苦痛の何物たるかをよく察して同情してくれるであらう。自分の心がすこしも要求していない幸福を頭から無理に強いはせまい。長吉は偶然にも母親のような正しい身の上の女と小梅のおばさんのようなある種の経歴ある女との心理を比較した。学校の教師のような人と蘿月伯父さんのような人とを比較した。

午ごろまで長吉は東照宮の裏手の森の中で、捨て石の上に横たわりながら、こんなことを考えつづけた後は、包みの中にかくした小説本を取り出して読み耽った。そして明日出すべき欠席届にはいかにしてまた母の認印を盗むべきかを考えた。

五

一しきり毎日毎夜のように降りつづいた雨の後、今度は雲一ツ見えないような晴天が幾日もなくつづいた。しかしどうかして空が曇るとたちまちに風が出て乾ききった道の砂を吹き散らす。この風とともに寒さは日にまし強くなって閉めきった家の戸や障子が絶え間なくがたりがたりと悲しげに動き出した。長吉は毎朝七時に始まる学校へ行くため晩くも六時には起きねばならぬが、すると毎朝の六時が起きるたびに、だんだん暗くなって、ついには夜と同じく家の中には燈火の光を見ねばならぬようになった。毎年冬のはじめに、長吉はこの鈍い黄いろい夜明けのランプの火を見ると、何とも言えぬ悲しい厭な